

「いけばなよもやま話」

卓話担当： 村司辰朗



華道や、茶道は世間ではよく知られた習い事です。私は自宅を教場として、華道や茶道を教えています。

私の祖父が初めて自宅でいけばなの稽古を始めたのは昭和6年です。その後母が茶道の稽古を自宅で行い、母が結婚して父も華道の指導に加わってきました。今は両親も他界し、私は華道、妻は茶道を指導して両親の後を継いでいます。

いけばなは流派数が多く、何百ともいわれますが正確な数字はわかりません。いけばなの大きな組織である「日本いけばな芸術協会」に加入しているいけばなの流派は、昨年暮れの時点で250余りでした。〇〇いけばな協会などといわれる組織は、大方の都道府県や多くの市町村にあります。因みに「大阪府華道家協会」は51流派、「豊中茶華道連盟」は13流派が参加しています。しかし参加流派のすべてが「日本いけばな芸術協会」に参加しているわけではないので、日本の中にはずいぶんの流派が存在することになります。

ところで華展会場へ行きますと作品の前に作者名が記された席札があります。本名ではなく雅号（私たちは華名といっています）で書かれた席札を見ますと「〇〇甫」などと書かれたものをたくさん見ます。この「甫」は親先生の雅号を受け継いでいるものです。親先生もまたその先生の親先生からこの字を受け継いでいます。ではその源はどこかという、ある一人の先生にたどり着きます。

山村山碩こと未生流の流祖です。もとは江戸の旗本の次男坊と伝わっています。故あって江戸を出奔し、東海道、山陽道から遠く九州まで流浪の旅をして、その後山陰道から浪速に居を構え未生流を開創し、未生斎一甫と名乗りました。その「一甫」の一字「甫」が弟子から弟子へと伝わり、華展会場でよく目にするものとなるのです。

華道を習うということはきれいに花を挿ることも一つの目的ですが、それだけで十分とは言えません。花を挿るのには目に見える部分であって、目に見えないもっと大切なことを学ぶものです。

それは挿けた花が少しずつその姿を変え、最後には枯れてしまうところに大切なものを見ることです。わかりやすくいえば、生きているものはいつかは死を迎えるということです。それならばその生を大切にしましょうということです。このことはいけばなを学ぶ若い人にこれからも伝えていきたいと思います。